



Title	生業活動と一方的贈与をめぐる社会関係 : バングラデシュ村落社会の文化人類学的研究
Author(s)	西川, 麦子
Citation	大阪大学, 1996, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/39702">https://hdl.handle.net/11094/39702</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	西川 菱子
博士の専攻分野の名称	博士(人間科学)
学位記番号	第 12306 号
学位授与年月日	平成8年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科人間学専攻
学位論文名	生業活動と一方的贈与をめぐる社会関係 —バングラデシュ村落社会の文化人類学的研究—
論文審査委員	(主査) 教授 青木 保  (副査) 教授 菅野 盾樹 助教授 小泉 潤二

### 論文内容の要旨

#### ・論文のテーマと調査研究の対象

本稿は、バングラデシュでの実地調査にもとづき、外部の者にとって、「とらえどころのない村」とうつる村落社会が、住民にとってはどのような空間、社会領域であるのかを探る事例研究である。調査研究の対象は、筆者が1988年12月から1991年3月にかけてのべ1年5ヶ月間滞在した、バングラデシュ、タンガイル県のM村、およびその周辺地域である。調査地の村落社会における生業活動と一方的贈与をとおして、住民の社会的位置づけ方、対他関係、社会的境界や集団のあり方を考察する。

#### ・先行研究批判と本稿の研究視点

バングラデシュ農村は、調査研究者にとっては、2つの点で「とらえどころがない村」とみなされる。第1に、集団の組織性が弱く、自律的で持続的な社会単位や、共同体的な村落を見い出せないことであり、第2に、住民の社会的な位置づけや序列が、体系化、制度化されていないことである。バングラデシュは人口の8割以上をムスリムが占め、少数の例外を除き、ある人の職業や社会的地位が出自によっては規定されず、社会全体をおおうカーストのような序列システムはみられない。だが、村落社会の実体とは別に、生産活動と日々の暮らしが密接に関わる農村の末端の空間領域において、成員の社会的な位置づけや社会関係を規定する自律的な統合体が1個の集団として存在するはずであるという研究者の視点が、「とらえどころのない村」像を作りだしてきたのではないだろうか。人々がそこで生活している村落社会それ自体の特質を探る試みは、十分には行われていない。

バングラデシュはまた、世界の最貧国としてしばしばとりあげられる。経済的格差と貧困が存在する現状をどのように改善するかは、バングラデシュ研究と農村開発の主要なテーマの1つである。村落を対象とした実証研究においても、人と人との関わり方の多様性に注目するよりも、経済的、社会的不平等が再生産される構造や、経済状況が人々の社会的な位置づけや社会関係をいかに規定するかについて議論が集中している。調査研究者が設定した階級、経済的カテゴリーといった枠組から社会関係を論じ、パトロン—クライアント関係がバングラデシュ農村の主要な社会関係であると強調してきた。

特定の社会単位や集団、組織、経済的階層や社会的カテゴリー、といった枠組からバングラデシュ農村社会を分析してきた従来の研究にたいして、この論文では、人と人が関わる具体的な行為とその積み重ねに着目する。そこから、経済的格差、不安定な経済、社会状況のもとで選択の可能性を様々に制約されながらも、自己を社会に位置づけ、

人と人との関係に働きかける住民の主体的な側面や、価値観、指向性、社会的評価にたいする意識などの住民の内面的側面、住民意識や社会的境界が、生成、顕在化し、集団として機能する動的な側面をとらえる。このような問題を論ずるにあたって、村落レベルの空間領域において密度の濃い活動と住民の対面的な関係が繰り返される行為として、M村住民の生業活動と、M村を含む調査地域のムスリムの一方的贈与とを、題材としてとりあげる。

#### ・論文の構成と内容

論文全体は、12章からなる。1章序論では、先行研究を批判的に検討し、論文のテーマと研究視点を明らかにする。2章では、バングラデシュの村落レベルの社会的境界と行政単位、筆者の調査地について概説する。本論は、I部（3章～6章）の生業活動と、II部（6章～11章）の一方的贈与とからなる。6章、11章で、各部のまとめと考察を行う。最終章である12章では、論文全体の結論としての性格づけをまとめて議論する。

I部で扱う生業活動とは、個人や世帯が収入をえるための諸活動をさす。M村は、ムスリム集落とヒンドゥー集落からなるが、住民の生業活動の携わり方は、ヒンドゥーもムスリムも出自によって規定されることはなく、基本的には個人、世帯の判断にもとづく。論文では、世帯を、他とは区別された独立性の高い生産、消費の単位とみなすが、同じ世帯の成員のあいだでの収入獲得手段の選択、戦略、価値観の不一致にも留意する。3章では、M村世帯間の耕地所有の格差と耕地貸借について、4章では、農業賃金労働（労働者の空間分布、年間の需要サイクル、諸雇用・労働形態の特徴や住民の評価、選択、雇用関係など）について、5章では多様な農業外労働と住民の選択の可能性と制約（就業投資、教育投資、職種別の評価、など）について扱う。住民、世帯の生業活動の多様性とその実態をとらえ、大きな経済的格差、不安定な収入、十分な生産手段を所有しない人々を包括する特定の集団、組織の欠如、住民をとりまく社会、経済状況の変化など、従来の研究が強調してきた側面についても論ずる。だが、M村住民の生業活動をとおしてとくに注目して考察するのは次のような問題である。

収入獲得の活動の携わり方は、個人や世帯の経済状況に大きく制約されるが、それゆえに、世帯、個人間の差異が顕示され、第3者の視線、評価をとおして、社会的に意味づけられやすい。経済状況のみが住民の生業活動を決定づけるのではなく、住民それぞれが社会的評価をどのように意識するかによって、収入手段、労働形態の選択も左右される。また、M村住民のあいだでは、特定の社会関係を維持しそれに依存することによって、安定した耕地借入や農業賃金労働の就労機会を確保しようとする傾向はみられない。労働力提供側が、雇用者とのあいだで優劣や従属関係が明示される労働形態を好まず、雇用関係を非個人的な契約関係にとどめようとする。パトロン・クライアント関係を、農村における主要な社会関係とみなすことに疑問を呈し、住民の対他関係における指向性を考察する。

II部で扱うムスリムの「一方的」贈与とは、「受贈者から返済を期待せず、受贈者に返済義務がなく、実際に贈与者に返済されない」贈与であり、物乞への施し、特別な事情を抱えた住民への金銭、物品での支援、犠牲祭での供犠動物の肉の分配、ヒジュラ暦にもとづく宗教行事や葬送儀礼における食事のふるまい、モスク、マドラサへの寄付、などをさす。この論文で論ずるのは、ムスリムと神との総体的な交換体系ではなく、返済されない贈与をめぐる世俗における人と人との関わり方についてである。大きくは2つの問題を扱う。1つは、地域の施しの慣行と物乞の存在についてである（7章、8章）。調査地では、どの村、集落においても週に1度の施しの曜日が定められている。他に収入獲得の手段をもたない地域住民（高齢者、身体障害者、寡婦など）が、施しの曜日の村々を回り、米などの施しを受けて生計をたてている。男女の物乞の社会的、文化的認知のされ方の相違に注目しながら、多数の物乞が生み出される要因（世帯の特徴、保障制度の欠如、社会変容など）を探り、明確な境界をもたない広い地域社会に組み込まれた社会保障の一形態として、物乞を受容する文化的、社会的仕組を考察する。

もう1つは、M村のムスリム集落という特定の空間領域に焦点をあて、ヒジュラ暦にもとづく宗教行事、葬送儀礼などにおける一方的贈与（食事のふるまい、肉の分配、労働力提供など）をめぐる、一般住民のあいだでの社会関係について論じる（9章、10章）。一方的贈与は、第3者の視線に公開され、社会的評価の対象となることによって、贈与者が、経済力を誇示し、他者との差異を示し、自己をより上位に位置づける手段となりうる。その一方で、受贈者は、贈与者にたいして劣位の立場に立たされたり低い社会的評価を受ける可能性もあるが、人々は、一方的贈与をとおして個人的な人間関係や特定の社会関係が生成することを回避しようとする。また、犠牲祭における供犠動物の肉の分配では、住民の認識する社会的境界が明確に表われる。M村住民が主催する規模の大きな食事のふるまいでは、地域住民の視線、評価にたいする意識が、主催者以外のM村のムスリムの住民意識を触発し、労働力を提供するなど

住民の結束した集団としての行動が見られる。

I部、II部で扱う調査資料の内容や性格は異なるが、論文全体をとおして強調したいのは、調査地の村落社会が、外部の者にとっては「とらえどころのない村」にみえても、そこで生きる人々にとっては、共有された経験と意識のなかに、生活の現場としての空間、社会領域が確実に存在しているということである。ここでは、経済的格差が社会関係を作るのではなく、経済、社会の現状のなかで、人と人との多様な関係が展開される。住民それぞれが、日々の様々な行為のなかで他者との差異を示し、第三者の評価をとおして、自己を社会に位置づけてゆく。不安定な経済、社会状況において、特定の社会関係に固執しそれを維持することによって安全を確保するのではなく、対他関係を可変的なものにとどめ相手や状況、利害にしたたかに応じうる可能性を残そうとする。人と人との対面的な関わりの繰り返しと共有された経験の積み重ねのなかで、社会的境界や住民としての意識が、かたちを変えながら存在し、状況、目的におうじて人々の行為のなかに顕在化し、ときには集団としての行動を促す。この論文は、バングラデシュの一村落社会の住民の、無数の活動と動的な社会関係の一面を、生業活動と一方的贈与という限られた問題から扱い、変容する社会の一時期を描いたひとつの事例研究である。

### 論文審査の結果の要旨

本論文は、バングラデシュの村落社会の文化人類学的な長期集中的フィールドワーク研究の成果である。

本論文の特色は、従来、その社会集団や社会組織やまた序列システムの面で、まとまりや組織性が弱く、村落社会の自立性や持続性において「とらえどころのない村」とみなされてきたバングラデシュ村落社会を、そこに住む住民の側を中心とする立場からとらえることによって、これまでの「外部」の視点に対する「内部」の視点からみた村落社会像を提出しようとするところにある。とくにあくまでも村落社会の日常（現場）における人々の生活のあり方を徹底的に観察し理解することによって、そこに住む人たちの世界がきわめて動的ではあるが、まとまりをもつ社会関係を有することを明らかにした。これはバングラデシュ村落社会への実証的研究による新しい社会像の提出であり、画期的な研究の出現と評されるべきものといえる。

外部からは容易にとらえられない印象を与えるバングラデシュの村落社会の性格を、本研究者は第一に、住民たちが「自己」の社会的位置づけをいかに行うかを通して明らかにしようとした。強固に制度化されてはいないが、日々繰り返されるさまざまな行為（労働や贈与の仕方）の中で「他者」との差異が示され、「自己」の位置づけがなされてゆく。第二に、人々の関係が可変的な社会関係を中心することに注目し、固定された社会関係を維持してゆくのととは別の社会関係が存在することを明らかにした。相手や状況、また利害に従って対応されるきわめて動的な社会関係のあり方が明らかにされた。

第三に、集団のあり方の特徴を示した点があげられる。明確なメンバーシップによる強固な組織集団は見いだされないが、人々は共有されたいくつかの経験の中で住民としての意識や社会的境界をつくり上げている。事件を通して他の地域の住民に対する対他意識をもつことや儀礼などへの参加による集団行為によって、それが行われるが、全体として大変動的な集団のあり方が明らかにされた。

以上の諸点が、実態調査に基づく詳細な事例研究を通して示されている。大変見事なフィールドワーク研究の成果と評価される。

本研究は、バングラデシュ社会の研究として貴重な学的貢献であり、また従来の研究に対して長期的集中的調査研究を通して新しい観点を提示した文化人類学上の独創的研究成果と評価できる。また日本の学会に大きく欠ける、バングラデシュそして南アジア地域の研究としても、これまでの欠を埋める貴重な学問的寄与と見なすことができる。

以上の面からみて、文化人類学的専門研究として高く評価のできる労作であり、十分博士学位に値する研究であるとみなすものである。